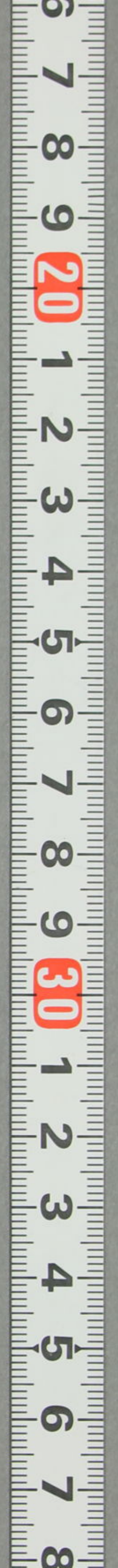


新編歌仙傳

冬

5  
4666  
4



門 5  
4666  
4

新野影發句集卷之五

十月

秋暮

空のうらみかきかき

土佐

里晴

降雨乃やせき

鶴翅

小春

いよりのうらみかき

江戸

二柳

さきかき

伊勢

有時

あつちあつち

徐行

小六月

あつちあつち

幽篁

あつちあつち

其思

昭和十六年一月十一日寄  
尼野貴英氏贈

蝶夢編



法影講

十夜

經子講

比合傳也軍鎗百の古後子  
お金傳也之身才一升細多衣  
管好子志強しむは志のさ  
一教く自お中入る十夜丸  
軍中入るもさる中教丸  
海軍入るもさる中教丸  
水仙も送る所あるはさし  
みさるも掃もさる中教丸  
足さるも掃もさる中教丸  
一尺の鯛も送る所あるは

和泉 松後  
長政 花屋  
由口  
珠曼  
十城  
良城  
紀伊 飯哉  
紀伊 牛十  
紀伊 淹列  
夢光

冬二

哲書

冬三日

短日

冬月

神を自そ掃き人の法極きん  
冬の日れ朝のさる小魚の形  
冬の日れ朝のさる小魚の形  
冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
一里行もさる冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
何れもさる冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
冬乃日也れ朝のさる小魚の形  
冬乃日也れ朝のさる小魚の形

五城  
斗外  
如泊  
素考  
上野 几熊  
陸奥 素謀  
とに 鳥高  
古鈴  
此不知  
舞風



時雨

雨を本邦のこまきりもの意  
しるはれ標の葉ちもせ初これ  
初し建結るものるは徳有り  
さう法心く心きりつりや初毒  
おのちりし屋敷を越え初心  
空を牛馬のちりもたつ瀬前  
月とるあまの影は白雲の影  
初時分福をいふ 雲屋の房  
すくくを本家の日おちり初時  
心くくをいふ 後の日おちり

時雨

冬四

六窓  
傘籠  
鳥考  
芦仙  
松尾  
却花  
落潮  
完本  
曉差  
泰溪

時雨

町をちや町の中の日暮し  
志くくを本家の日おちり  
おのちりし屋敷を越え初心  
空を牛馬のちりもたつ瀬前  
月とるあまの影は白雲の影  
初時分福をいふ 雲屋の房  
すくくを本家の日おちり初時  
心くくをいふ 後の日おちり

凡化  
万戸  
公雄  
雅淳  
吉長  
暮拾  
甫尺  
子坤  
松後  
蝶夢

川舟雨

初霜

初霜

多仙の花あつたしつらふ  
志の原も程焚くつら見毫  
河の舟も遠く程く小山似  
川舟も程のつらきつら  
山舟も程のつらきつら  
志の原も程のつらきつら  
河の舟も程のつらきつら  
川舟も程のつらきつら

極广 勢江  
陸奥 似蓉  
伊豆 平角  
佐馬 吳右  
下法 有橋  
極十 鳳毛  
坂中 行充  
五層

冬五

霜

初霜もまじりて  
けり霜も程のつらきつら  
左の舟も程のつらきつら  
鶴の羽も程のつらきつら  
朝霜も程のつらきつら  
阿の舟も程のつらきつら  
朝霜も程のつらきつら  
阿の舟も程のつらきつら

陸奥 楓林  
下法 棠花  
陸奥 雲鶴  
陸奥 化石  
素光  
尾 素釣  
丹波 倭泉  
極十 泉々  
文彦

霜夜

朝の光もまださすまじき  
灯の光もまださすまじき  
松の葉もまださすまじき  
飯の味もまださすまじき  
枯れ木もまださすまじき  
よもぎの枝もまださすまじき  
霜の降りもまださすまじき  
根のつきもまださすまじき  
心もまださすまじき  
志もまださすまじき

長法

白粉

瓦泥

三雲

月丘

五喬

群長

重厚

得皮

素植

紫鏡

霜柱

霜折

又六

初雪

雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき  
雪の初もまださすまじき

長法

白丈

丁休

巨鳥

文里

鼓水

青菴

古菜

梅珠

一斤

雪



誰人より言らりて事なる雲のこれ  
 雲のくま馬とて名はれしもの  
 灯の光影のまはるる雲の雲  
 居凡そ舟火のつらむ雲の雲  
 舟のなまこゝも雲の雲  
 市の中も雲の雲  
 雲の雲の雲の雲  
 遠くの雲の雲  
 元とて雲の雲  
 雲の雲の雲

後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後

蝶躞  
 敬菴  
 坡屋  
 太溪  
 百尾  
 五雲  
 猿曼  
 麦光  
 祥院

何れも言はれし事なる雲のこれ  
 雲のくま馬とて名はれしもの  
 灯の光影のまはるる雲の雲  
 居凡そ舟火のつらむ雲の雲  
 舟のなまこゝも雲の雲  
 市の中も雲の雲  
 雲の雲の雲の雲  
 遠くの雲の雲  
 元とて雲の雲  
 雲の雲の雲

後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後  
 後

南尺  
 作  
 蕙里  
 竹風  
 塘里  
 嶗山  
 知白  
 雲步  
 一徹  
 素心

雪見

雪見の雪はあつた人雪  
小坊の雪はあつた人雪  
掃雪の雪はあつた人雪  
不雪の雪はあつた人雪  
雪の雪はあつた人雪  
雪の雪はあつた人雪  
雪の雪はあつた人雪  
雪の雪はあつた人雪

如治

古菜

徳島

頂雪

雪牛

左人

聖涼

雨人

極主

優水

雪圍

雪磔

雪佛

冬八

雪卷

雪女

雪君

雪卷の雪はあつた人雪  
二種目の雪はあつた人雪  
雪女はあつた人雪  
雪女はあつた人雪  
雪女はあつた人雪  
雪女はあつた人雪  
雪女はあつた人雪  
雪女はあつた人雪

雪氏

雪白

波鷗

土鈴

青々

雪牛

雪文

徐来

踏紅

踏紅

霰

春枝のつりたる雪の香  
夕の風が吹く雪の香  
月夜の雪の香  
雪の香の香の香  
雪の香の香の香  
雪の香の香の香  
雪の香の香の香  
雪の香の香の香

五律  
金鸞

霰

翠兒  
蘇木  
其正  
惟鶴  
弄鶴  
可  
菊五  
东儿

雪竿

冬元

雪船

そのりや梅舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら

画舟  
知在  
幽管  
東明  
林子  
素兒  
雪霽  
梅居  
松笠

梅

初氷

川原の雪  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら  
雪舟のつら

氷

氷柱の如き氷柱

松波 突市

氷の如き氷柱

松波 曲旭

氷の如き氷柱

松波 大島

氷の如き氷柱

松波 右牛

氷の如き氷柱

松波 若舟

氷の如き氷柱

松波 柙雨

氷の如き氷柱

松波 杖老

氷の如き氷柱

松波 萱水

氷の如き氷柱

松波 宇林

氷の如き氷柱

松波 舞臺

凍

冬十

氷柱

氷柱の如き氷柱

松波 舞臺

氷柱の如き氷柱

松波 宇林

氷柱の如き氷柱

松波 萱水

氷柱の如き氷柱

松波 杖老

氷柱の如き氷柱

松波 柙雨

氷柱の如き氷柱

松波 若舟

氷柱の如き氷柱

松波 右牛

氷柱の如き氷柱

松波 大島

氷柱の如き氷柱

松波 曲旭

氷柱の如き氷柱

松波 突市

氷柱の如き氷柱

松波 氷

氷柱の如き氷柱

松波 氷

氷柱の如き氷柱

松波 氷

煮凍

煮凍の如き煮凍

松波 五雲

煮凍の如き煮凍

松波 奴宮

煮凍の如き煮凍

松波 月居

煮凍の如き煮凍

松波 收芋

煮凍の如き煮凍

松波 乙二

煮凍の如き煮凍

松波 古川

煮凍の如き煮凍

松波 標菱

煮凍の如き煮凍

松波 榮凡

煮凍の如き煮凍

松波 花鳥

煮凍の如き煮凍

松波 文上

鐘氷

鐘氷の如き鐘氷

松波 古川

鐘氷の如き鐘氷

松波 標菱

鐘氷の如き鐘氷

松波 榮凡

鐘氷の如き鐘氷

松波 花鳥

鐘氷の如き鐘氷

松波 文上

冬山

冬山の如き冬山

松波 榮凡

冬山の如き冬山

松波 花鳥

冬山の如き冬山

松波 文上

冬野

朽野

枯野

死のやうな程言へば冬野  
 庵雪の影の影の影の影の影  
 雪指し焼く阿るるるるる  
 人々をなやませるるるるる  
 くらん木丹果や棒のり乃吉  
 腐敗の成るるるるるるる  
 朽野も牛乳の中のものも  
 一面の白の雪の影の影の影  
 自らもこの野の中流小川の影  
 自ら枯れし枯野もひるるる

潭月  
 民古  
 君山  
 雪居  
 睡花  
 里桂  
 七  
 七  
 仙李  
 五

又二十一

かぬるも

菓名

あゝ海の浜

雨銘

影の中

雲

白くひら

麦字

やうな

踏指

こゝろ

東芽

所を

筆海

自然

上谷

何の

無赫

馬の

魚坊

冬川

牛尾のふりかきあはれ  
 昌々  
 可箇  
 我百  
 鼓缶  
 一古  
 臥央  
 五来  
 阿誰

水個

又十二

冬構

層風  
 竹風  
 忘功  
 聖陽  
 柳絮  
 波幽  
 位七  
 届位  
 可兆  
 其始

北窓閉

雪垣

叢卷

由は瑞也山の如く一日をやり  
山は雲をたふらふとて雲の層をた  
敷き居る也たのふらふは陸の如  
やふきて日影おろぬかられ里  
此巻て風のするは此巻の如  
言らば此巻の如くも言らむ  
冬は冬も言ふ事ある風の如  
物言へん利も言ふ事ある風の如  
こまへては御座らん冬も言  
舞の如くも言ふ事ある風の如

葉之  
呂真  
塘里  
鏡水  
呂島  
峯白  
如走  
孤崇  
鯉同  
風逸

冬籠

神への世も言はれ冬籠  
葉は冬も言ふ事ある風の如  
福言科也言ふ事ある風の如  
善言科也言ふ事ある風の如  
冬籠の如くも言ふ事ある風の如  
やうあはれ言ふ事ある風の如  
法言科也言ふ事ある風の如  
言ふ事ある風の如  
風は冬も言ふ事ある風の如

標陰  
路風  
葉谷  
吳竺  
北雅  
只言  
冬里  
龍山  
鷺白  
風足

茶口切

爐用

炉用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ  
爐用之木乃居りてんふらるれ

楚山

珠夏

百維

無淨

東几

衣衣

五角

木原

珠夏

鏡雙

火燧

火桶

冬十四

火鉢

火燧

埋火

火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は  
火桶の形は

輪々

二柳

尺布

百尾

槐立

千舟

珠夏

野香

人左

玄免







湯婆

寒

たき火の湯をいそいで  
湯に入るといふは  
有明の夜に  
花をいそいで  
川に  
船  
ついで  
おの  
きり

飯無  
慎事  
見二  
善白  
仙露  
楊花  
梧扇  
桂影

冬十七

水漬

凍瘡

靴

ついで  
湯  
花  
川  
船  
ついで  
おの  
きり

賣無  
泰漢  
妻光  
貝来  
美婦  
山葉  
百川  
雨橋  
此得

將

木枯風

木枯

眠る朝来りし夢に松う足  
織るやふらふら馬建の心  
ゆるらふお籠るいあも下位女  
木々々々心まを疎き入日る  
こゝろも心は處を熟して日暮入  
あはれは乃猶せしこゝろ夜静か  
木枯風の中中も風は吹く  
風やふらふら木枯の中中  
眠るこゝろも心まを疎き入日る  
木枯やもあはれは乃猶せし

李朝

若菜

路人

席園

東羊

羽人

玉色

周江

青莚

里杖

冬十八

あはれは乃猶せしこゝろ夜静か  
木枯風の中中も風は吹く  
風やふらふら木枯の中中  
眠るこゝろも心まを疎き入日る  
木枯やもあはれは乃猶せし  
木枯風の中中も風は吹く  
風やふらふら木枯の中中  
眠るこゝろも心まを疎き入日る  
木枯やもあはれは乃猶せし

飛川

脱負

鼓吹

空厚

羅風

綾夏

戸幽

知水

麦字

止令

落葉

定ぬる葉のわが落葉のこころ  
寧ろのこころのわが落葉のこころ  
果てぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉  
吹よけぬるかたのこころのわが落葉

文海  
為交  
只有  
花鳥  
圖南  
錦夢  
塘上  
秋禁  
芝月  
落氷

冬十九

木葉

夕陽の影を木葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ  
かたのこころのわが落葉のこころ

文海  
銀羽  
眉山  
松濤  
春南  
由桑  
梅笛  
鴉柳  
素外  
秋毛

散紅葉

朽葉

冬枯

冬枯や梅のこころ吹かれ候  
冬枯や夕人の暮途に  
冬枯や元気のなき木程の  
冬枯や中より候風の  
冬枯や砂のこころ  
冬枯や海もあはれ  
冬枯や店もあはれ  
冬枯や心もあはれ  
冬枯の心もあはれ

大島 其黒 飛川 竹風 抱嵐 冬原 昌博 石牙 松素 必素

冬木立

冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ  
冬木立の心もあはれ

冬木立

枯柳

枯柳や河津の舟  
枯柳の心もあはれ  
冬枯や夕人の暮途に  
冬枯や元気のなき木程の  
冬枯や中より候風の  
冬枯や砂のこころ  
冬枯や海もあはれ  
冬枯や店もあはれ  
冬枯や心もあはれ  
冬枯の心もあはれ

魯白 旧山 借川 谷水 泰重 峯二 鷗沙 竹調 友志 阿涼

枯柳

枯柳

枯櫻

枯蓮

枯萩

枯萩

為さるるも花一時のさくら種  
何れのも増も冬木の梅も  
古葉枯く昔のさくら行かぬ  
枯果て有るもさくら花解  
さくら花も今もさくら花の意  
枯るもさくらもさくら花の意  
さくら花もさくら花の意  
萩もさくらもさくら花の意  
風もさくらもさくら花の意

喜安  
陶々  
李山  
杜由  
秀曉  
警春  
切地  
湖房  
荊海  
戸幽

冬廿一

枯萩

枯萩

枯萩

枯萩

枯萩

枯萩

枯萩

枯るもさくらもさくら花の意  
何れのも増も冬木の梅も  
古葉枯く昔のさくら行かぬ  
枯果て有るもさくら花解  
さくら花も今もさくら花の意  
枯るもさくらもさくら花の意  
さくら花もさくら花の意  
萩もさくらもさくら花の意  
風もさくらもさくら花の意

雨落  
五来  
望音  
望音  
乙介  
秋也  
集西  
蘭圃  
古巢  
志柳







枇杷花

冬牡丹  
茶花  
枇杷花  
冬牡丹  
茶花  
枇杷花

丹后 何年

出づ 一弦

以手 和永

三粒 非倫

吳琴 珠研

真情 所凡

以流

強の 卷面

冬廿四

大蔓花

大蔓花  
公年克  
錦木  
室梅

以文

躑山

善哉

瓜坊

茶城

唐平

曾氏

桐古

兼文

膳嘉

藺植

大根

蕪

胡蘿蔔

蕎麥

麥詩

うぐ藺やを田中かほり

わが根や田の面も水も人のけ

引のき勢大根もまらふれ較

後まうも風の風情も大ま

れんもまらふもあかあ

るのりもまらふもあかあ

申風やまらふもあかあ

このほもまらふもあかあ

株まらふもあかあ

まらふもあかあ

丹波 藺植

水行

布重

茶煙

五橋

芦洲

滝水

落橋

里登

米五

冬廿五

丁菜

苴菜

網代

まらふもあかあ

まらふもあかあ

人のまらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

まらふもあかあ

故栖

揚花

苴村

懐花

南窓

其網

冬水

一峯

玉木

魚坊

水魚 鮒

Handwritten cursive text in the right column, likely a poem or a list of items related to the header.

一扇 桃五 竹青 喜尾 柳舎 得皮 鳴泉

冬廿六

紫續 竹苟 鱈 生海胤

Handwritten cursive text in the left column, continuing the list or poem from the right page.

松洞 鷗妙 于當 吾舍 草鳥 魚候 仙風 子泉 南南 古橋

河豚

細く切らして酒に漬けておく  
つぎは酒を煮た鍋の中に入れて  
ゆき汁が白くなるまで煮る  
煮終った後汁を少し減らし  
客人の口に合うように腹を  
割き汁を少し減らし煮る  
煮終った後汁を少し減らし  
煮る

信玄 五来

信玄 希双

自徳

李山

如伝

信玄 巴令

末 九和

信玄 乙坡

冬廿七

千鳥

籠に入れて酒に漬けておく  
つぎは酒を煮た鍋の中に入れて  
ゆき汁が白くなるまで煮る  
煮終った後汁を少し減らし  
煮る

信玄 門器

信玄 百井

信玄 今耕

信玄 林雅

信玄 薩亨

信玄 李雲

信玄 素牛

信玄 素牛

信玄 琴雷



水鳥

鷓鴣

水鳥の羽を削り朝日那  
みくも有指つる新を  
凡鳥のその声は舞たる  
水鳥の羽を削り朝日那  
水鳥の羽を削り朝日那  
水鳥の羽を削り朝日那  
水鳥の羽を削り朝日那  
水鳥の羽を削り朝日那

秋水  
當車  
吐詠  
凡堂  
丁友  
山君  
客里  
朽鳥  
作家  
一輪

冬廿九

木鬼

鷓鴣

木鬼の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那  
鷓鴣の羽を削り朝日那

丁考  
修家  
蝶夢  
花郎  
麦字  
梅班  
巴陵  
輕舟  
兼百  
宗談

鶯子

冬繩

納豆

其為也 持るるもや言子  
しんや朝日おあけの  
鳴るる好言の口も急務院  
冬の種日風もあつた  
冬は人今もあつた  
千の河もあつた  
冬も打もあつた  
納豆もあつた  
一冬もあつた  
冬もあつた

伊豆

雪下

養蜂

如在

西李

無徒

徳島

染海

貝糸

百尾

取山

冬三十

芥焼

十一月

霜月

冬至

曆賣

髪置

芥焼の月

霜月の陽

冬至の梅

曆賣の神

髪置の女

吉行

寒候

寒桐

之馬

之弓

四道

知凡

壽郎



御神樂  
 新嘗會  
 被初  
 袴著  
 田神樂

御神樂  
 新嘗會  
 被初  
 袴著

田神樂

冬三十一

火燒  
 吹草祭  
 子祭  
 子燈心  
 空也忌

火燒  
 吹草祭  
 子祭  
 子燈心  
 空也忌

火燒  
 吹草祭  
 子祭  
 子燈心  
 空也忌

冬三十一

鉢鼓

鉢鼓の音は遠くまで響く  
京中にもこの音は響く  
おのゝ音はあつてはなれぬ  
あつてはなれぬ人なれぬ  
人の世は人なれぬ  
松の葉もなれぬ  
細い音は響く  
大師講の音は響く  
梅も響く  
松葉も響く

秋中

蘭臺

秋中

密古

青々

雷文

春祐

菊山

楊花

杜川

己百

冬三三二

大師講

御七夜

顔見世

おのゝ音は遠くまで響く  
京中にもこの音は響く  
おのゝ音はあつてはなれぬ  
あつてはなれぬ人なれぬ  
人の世は人なれぬ  
松の葉もなれぬ  
細い音は響く  
大師講の音は響く  
梅も響く  
松葉も響く  
おのゝ音はあつてはなれぬ  
あつてはなれぬ人なれぬ  
人の世は人なれぬ  
松の葉もなれぬ  
細い音は響く  
大師講の音は響く  
梅も響く  
松葉も響く

顔見世

梅人

顔見世

紫女

顔見世

鷗鳥

顔見世

春祐

顔見世

春志

顔見世

雨降

顔見世

雲翔

顔見世

子楓

顔見世

山吹

顔見世

錦水

芽柳

太山極

冬玉梅

種花

栴

葱

雲海苔

初海苔

鰺

栴の花はもろこし家から来た

うらなひにもなる

言中草は昔岸の向うから

南の山から来た

言中草は昔岸の向うから

うらなひにもなる

言中草は昔岸の向うから

うらなひにもなる

言中草は昔岸の向うから

蘇五

卯中

友言

菱花

檉中

斗流

眠子

雨申

仙言

晋信

冬三三三

鯨

牡蛎

鱒鱒

杜支魚

乾鮭

七浦の雲はあつて

かきくちや自然なる

人のあつては

かきくちや

うらなひにもなる

言中草は昔岸の向うから

うらなひにもなる

言中草は昔岸の向うから

うらなひにもなる

素五

支百

糸更

近江

几重

芋水

古声

兼男

木朶

仙言

薬食

獵 葦香湯 霰酒 生薑酒 鷄印酒

人... 塙... 飯... 菜... 石... 志... 破... 雪... 雪...

軒秋 貝朱 睡善 繪摺 羽毛 氣悠 丘高 里秋 麦燕

冬三四

夜具引

ト... 大... 南... 獲... 物... 膏... 於... 乃... 乃... 乃...

右收 慈美 瓦合 花縣 莖史 跨山 鳴鳳 佳...

鷹狩



事始  
 冬の日は行ふは佛なり名  
 根自はれ地獄の海に傳あり  
 女の毒はたふさるるも始  
 家にて解るるや事あり  
 相向し重なる事の自れあり  
 空事入るるも何れも  
 紙障のありは事なきは肉  
 式事示氷の取わかぬの事  
 障子のうら松ありあけの事  
 葉の根のふさるるは事あり

甲斐 東樹  
辰波 自至  
 巴川  
 如法  
末 晋来  
左 其環  
 三泉  
 葉陸  
 一幹

冬三六

寒雨  
 寒内  
 寒入

寒月  
 寒月はくはれも何れも  
 寒月のうら松ありあけの事  
 寒月の葉のうら松ありあけの事  
 寒月の櫛のうら松ありあけの事  
 寒月の伯母を捨てる事あり  
 寒月の通るるも何れも  
 寒月の葉のうら松ありあけの事  
 寒月の葉のうら松ありあけの事  
 寒月の葉のうら松ありあけの事  
 寒月の葉のうら松ありあけの事

寒月  
 西風はくはれも何れも

何れも 他事あり  
左 芦舟  
左 魚鱗  
左 梨風  
末 金備  
上 素雄  
 俊祐  
 千影  
半陸 馬蹄



寒造

くさきさきし海にわたりて

浪志 青波

寒水

白き梅の花は波に流るる

浪志 山吏

寒紅粉

刀をくち梅の紅もやう

成底 呂情

寒椿

唇よりくち梅の紅もやう

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

成底 尺素

冬三ノ八

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

浪志 和友

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

山吹 吳野

寒梅

くさきさきし梅の花は波に流るる

雲帯

早梅

早梅の花は波に流るる

杜口

冬梅

冬梅の花は波に流るる

花白

冬梅

冬梅の花は波に流るる

洞壺

冬梅

冬梅の花は波に流るる

楓川

冬梅

冬梅の花は波に流るる

船茗

冬梅

冬梅の花は波に流るる

桃門

冬梅

冬梅の花は波に流るる

芦水



鶺鴒巢 高貴 札納 衣配 節分 年越

かきこみの葉や梅のつらさなり  
流るる川の年をくほく 世々の  
徳平のしとつれつて首のま  
方條のまきもまきく札あきめ  
ふつぬめふつぬめふつぬめ  
花とぬめふつぬめふつぬめ  
そまきの敷ふあるまきぬめ  
長らふもふつぬめふつぬめ  
つとぬめふつぬめふつぬめ  
けつぬめふつぬめふつぬめ

月陽 安之  
其中  
相阿  
效枝  
茶峯  
下野 文磔  
尼 古友  
後山  
朱三  
後水

冬三九

變舟 厄拂 松刺 豆打

とつぬめふつぬめふつぬめ  
つとぬめふつぬめふつぬめ  
傾城のまきもまきく札あきめ  
清くまきぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ  
まきぬめふつぬめふつぬめ

幸陸 柜柙  
丹鈴  
昇左  
隼山  
朝秋  
他  
貝朱  
丁水  
幸日  
其席

年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗

冬四十

年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗
梅	桃	李	杏	梨	櫻	橘	柑	柿	栗

目見  
煤拂

冬四ノ一

思擲の<sup>お擲</sup>なりや<sup>素兄</sup>擲<sup>披雪</sup>を<sup>引牛</sup>も<sup>鶴飛</sup>ら<sup>知仏</sup>ひ  
業<sup>餅烏</sup>抱<sup>三季</sup>の<sup>朝炊</sup>世<sup>三季</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>三季</sup>つ<sup>餅烏</sup>る<sup>三季</sup>擲<sup>三季</sup>根<sup>三季</sup>頼<sup>三季</sup>  
に<sup>餅烏</sup>擲<sup>三季</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>人<sup>餅烏</sup>  
を<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>  
擲<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>の<sup>餅烏</sup>世<sup>餅烏</sup>に<sup>餅烏</sup>擲<sup>餅烏</sup>

冬四ノ一

餅壽

餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>

餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>

餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>  
餅<sup>餅壽</sup>の<sup>餅壽</sup>世<sup>餅壽</sup>に<sup>餅壽</sup>擲<sup>餅壽</sup>

青蓮

秋毛あきの市

赤坂あかの市

又またの市

研けんの市

甘かんの市

只ただの市

首くびの市

足あしの市

鳥とりの市

鳥とりの市

秋毛

赤坂

又

研

馬

里

推

古

築

魯

年木

雛候

鏡等

市

冬四二

坐忘

隨和

旭布

巴川

其西

洞

如水

珠

五

茶

坐忘

隨和

旭布

巴川

其西

洞

如水

珠

五

茶

松賣	葉竹賣	穗長賣	羽子板賣	星佛賣	口書立
牛のふしをいへりしりもきり市 年々もきりいへり市其もきり 書いりもきりいへり市 市もきりいへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市
依中 為十	五什	荻屋	呂次	和十	葉之
		末 文車	梢舟	出雲	有東

冬四ノ三

古曆	古念
いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市	いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市 いへり市
都雀	鼓水
木原	吉系
折凡	柳莊
徳島	萬戸
巴明	

歳暮

素心のこころを海にまかせし年意  
とこころありて懺悔の心を  
横をこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意

月溪  
百韻  
春里  
瓦合  
比叢  
古植  
苾史  
九阜  
杜音  
冬季

冬四ノ四

行年

世の善隣へもはたかた  
板の事も学ばせし年意  
海の事も学ばせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意  
とこころにまかせし年意

蜂群  
字秋  
坡原  
墨糸  
乙牙  
著莪  
瓜あ  
二種  
花舟  
雨静

惜歳

春待

春近

小晦日

極く年やめ灯もあけたり  
行かぬや言ひなき来り隣の子  
今も来ぬや惜歳は危なりし  
春あけのやうにめでたき梅月  
さるはれや日かゝるまは福多軒  
其事もやち多建つ木も愛持く  
よき事もけしきも解りし喜なりし  
春あけのやうにめでたき梅月  
知世のりや春近のよき事も  
さるはれや世もめでたき事なり

女  
曾和

宿子  
度秋

片次  
彦中

血心  
梅月

信子  
不老

信子  
飛来

夜后  
幽篁

夜后  
二仙

蝶夢

如洋

冬四五

大晦日

除夜

年夜

大晦日

悠くやあきあきあき大晦日  
灯乃影青れもあき大晦日  
一と年の四もあきあき除夜  
等々あきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜  
あきあきあきあきあき除夜

お持

丹人

横子

鶴飛

夜后

小花

夜后

巴才

片次

黄治

信子

信子

信子

百尾

信子

信子

年籠

大とくもくしんせいのかんま  
補遺示年とくしんの海の那  
すくしん検白くしんしん巻

古謙 魚淵 芳水

冬四六終



